『西行聞書』歌注本文対観（上）

西　耕生

はしがき

今治市河野美術館には、「西行聞書」「人麿秘傳書」と称する二書を合綴した写本が蔵せられている（整理番号「331-622」）。縦24・6糎、横18糎の四半本。一面十行書き。列帖装の一冊である。薄い浅葱色のオモテ表紙左上の貼題箋に双行で「西行聞書／人麿秘傳書（ママ）」と記し、内題にも、前半を「西行聞書」、後半を「人麿秘傳書」と記す。遊紙一枚のあと第一丁オモテ右下には「阿波國文庫」の朱印が捺されている。『今治市河野信一記念文化館図書分類目録』（昭和四十九年三月）には「應仁初載孟冬中二日　馳笔　印」と誌す奥書に基づいて「応仁元写」（一四六七年写）と記録される重要図書の一冊である。両書の編者や成立時期、また合綴された理由も未詳であるが、それぞれの内容を概観すると、おそらく歌聖ならびに平安時代後期の歌僧に仮託された室町時代中期頃の歌学書かと目される。

これまで稿者は、地域の国文資料として活用すべくこの写本について調査する過程で、本書に類する資料は容易に見つからぬものと考えていた。ところが、田代桜子氏の指摘により、『西行聞書』に内容と形式の一部が酷似する『玉集抄』という資料の存在を知るに至った（平成二十六年度愛媛大学大学院修士学位論文参照）。

『玉集抄』には夙く、翻刻本文の紹介とともにその内容と性格について初めて検討を加えられた鈴木元氏の先駆的論考が具わる。その成果は次のとおり周知されてもいる。

玉集抄（ぎよくしふせう）

〔室町時代歌学書〕 外題、和歌玉集抄。編者及び成立年未詳。国立公文書館内閣文庫蔵、一冊。『新古今集』『新勅撰集』『万葉集』など、様々な歌集から抜き出した一〇三首に注を加え、一二八の用語の説明をしたもの。心敬や宗砌、また「連歌などにはかやうにはあるまじき也」とあり、連歌作者のために作られた書と推測される。『六花集註』や『秘蔵抄』『梵灯庵袖下集』などと近く、地下連歌師に伝わっていた秘伝の内容を伝えていると思しい。

【参考文献】『室町の歌学と連歌』鈴木元（新典社　1997）

（松本麻子）

〔古典ライブラリー版『和歌文学大辞典』二六二頁（平成二十六年十二月）〕

これに対して『西行聞書』はその書記形式および内容から、大きく前半と後半に二分されるものと見とめられる。書記様態をうかがうべく試みに第一丁オモテを翻字して示せば、以下のごとくである。

西行聞書

和哥六義之事

凪（興賦雅比）頌

風これハそへ哥也そへ哥とハおもふ心をかくし

て別の物にいひなして心をあらハす哥也

凪ハその色すかたハみえねとも物にふれて

鳳はしられたる故にこの哥かくのことく右に
たとへて鳳の哥といふ本哥に云
難波津に咲やこの花冬こもり今を春へとさくや此花
この哥の心ハ仁とく天王の御事をよミたれとも

一面十行書きの今治市河野美術館所蔵本は、一行目に「西行聞書」という内題を記したあと、改行してすぐに本文が続く（『玉集抄』も第一行に「玉集抄」という内題を示したあと改行してすぐ本文に移る）。二行目の「和哥六義之事」が本書第一項の見出しにあたり、古今和歌集序にふれる和歌六義の解説から始まる。かくして前半は、和歌の全体または歌句の一部を挙げて「和哥六義之事」「和哥乃四病之事」「八病之事」「こしをれ哥と云事」「返哥のしやうの事」の順に歌病や詠法を説明しながらそれらが秘伝たることを要所で強調し、さらに「遊ひし夜詞乃事」という見出しのもと、和歌初学抄のごとく歌語の異名を列挙しながら解説を施す部分を含んだ内容を有つ。一方、後半は、万葉・拾遺・新古今などの歌集や源氏・狭衣などの物語に収める和歌百首について注釈を施した部分である。

『玉集抄』と『西行聞書』を比べると、互いに前半と後半が入れかわり構成が異なっている。一つ書き形式で用語を解説する『玉集抄』の後半と、秘伝として和歌六義・歌病・詠法・由緒詞を解説する『西行聞書』の前半とでは、それぞれ記載の様態も内容も区々で対応していない。このような相違に対して『玉集抄』前半ならびに『西行聞書』後半の歌注箇所では、和歌の排列とその注説の内容がおおよそ一致するという著しい共通性が認められる。百三首を数える『玉集抄』に対して『西行聞書』は（前者の51・52・92を欠く）ちょうど百首であって採録する歌数に差があるにもかかわらず、被注歌の順序だけでなく個々に施された注釈が文言の細部にちがいを持ちながらも軌を一にするのである。つまり、歌注箇所の本文は異本関係をなすものと把握される。

両者を対照すると、『玉集抄』において疑問にとどまる注が『西行聞書』では断定されていたり、『玉集抄』に比べ『西行聞書』のほうに誤脱かと思しき箇所が見られたりなどするけれど、その逆の場合もある。例えば「筏士よ」の歌注を照らし合わせると、『西行聞書』に本文の瑕があるごとく見受けられようか。

筏士よまてこと、ハむ水上ハ五十日斗ふく山の嵐・・そ（玉 集 抄85）

筏士よまて事・とハん水上ハいか・斗吹・山のあらしそ（西行聞書83）

此・哥ハ紅葉浮水と云題の哥也大井河のほとりにての哥とかや所からかやうにハよめる欤嵐・・山の紅葉・なこの哥ハ紅葉浮水と云題の哥也大井河のほとりにての哥とかや所からかやうにハよめり・あらし山のもみちなと此大・川にちりうきてなかる、を見て水・上ハいかハかり嵐・・のふけはかくのことく紅葉・ハなかる、そと・大井河にうきちりてなかる、をミて水乃上ハいか斗・・あらしのふけはかく・・・・もみち・なかる、そといかたしにとふ心・・也連哥なとにハかやうにハあるましき也題の字を云・出さすしてハせぬ物・也舟なとといかたしにとふこ、ろ也連哥なとにハかやうにハあるましき也題の字をいひ出さすしてハせぬもの也舩なと

、いハねともこき出てなと・よめる也・

、いはねともこき出てなと、よめるなり

和田の原・こきいて、ミれハ久かたの雲ゐにか、る沖津白波（改行字高ママ）

和田のハらこき出て・ミれハ久方・の・・・・・・・・・・・・・（改行字高ママ）

なと、よめるハ舟といふ字なき也
　なと、よめるも舩といふ字なき也

しかしながら注釈末尾で、「舟（舩）」という語を明示せずに「漕ぎ出でて」と詠む例歌を両者ともに字高を上げて書写する点に注意するなら、どちらも口授の現場から距たり書承をへて整えられたレイアウトをもち、厳密に原態を遺す写本ではありえない。とはいえ相対的に、上の句のみを引く『西行聞書』のほうが当座の流れに沿った文脈をうかがわせるもののごとく、歌句全体をきちんと記す『玉集抄』のほうが書本として整えるべく固定されたありようを示すものかと想察される。概して両者の本文関係に単純な優劣は認められず、むしろ双方の対観によってありうべき注解本文を見透しうるところがある。

ここに、記載内容の読解に資すべく、『玉集抄』『西行聞書』両本のデジタル撮影データに拠りながら、両書の歌注箇所に関する本文の対観表を作成する。なお、紙幅の都合により、『西行聞書』の被注歌百首のうち前半五十首までを本稿（上編）に収め、後半の五十首については次号（下編）に掲載することとしたい。

▼西行聞書・玉集抄　歌注本文対観　凡例▲

〈本文の配置〉

一　今治市河野美術館蔵『西行聞書』後半の歌注箇所の本文を、国立公文書館内閣文庫蔵『玉集抄』前半のそれと対照させて、誤写・衍脱・傍記等をそのままに翻刻する。右に『玉集抄』本文を、左に『西行聞書』本文を配置する。なお、「・（ナカグロ）」の表示は対照される文字のないことを示す。

〈歌番号の表示〉

一　被注歌には検索の便宜上、歌末の丸括弧内に算用数字で歌番号を掲げる。百三首を採録する『玉集抄』に比べ百首の採録にとどまる『西行聞書』には、『玉集抄』（51）（52）（92）にあたる三首を欠く。なお、「筏士よ」（玉集抄85・西行聞書83）の歌注に引かれる「和田のハらこき出てミれハ久方の」の歌は注解の一部と考えられるので、改行して注よりも字高を上げて記す両者の書記様態を保ちながら、歌番号は附さなかった。

〈翻刻の方針〉

一　原本をできるだけ忠実に翻刻するよう努めたが、読解の便宜上また印刷の都合上、以下のような方針を採った。

1. かなは原則として通行の字体に改めるが、原本に用いられた字形をそのまま保存したものもある。「支」「セ」「川」「ニ」「乃」「之」「ハ」「ミ」「メ」「屋」「井」などその一例である。
2. 漢字も原則として通行の字体に改めるが、原本に用いられた異体の字形をそのまま保存したものもある。「哥」「葉」「凪」「杁」「舩」「浪」「仲」「聲」「烋」「莓」などその一例である。
3. 補入記号の「。」「•」や反復記号の「ゝ」「〳〵」は原本のままに従い、表記を統一しない。
4. 原本の異文注記はそのまま翻刻するとともに、私に施した傍注は丸括弧で括り、区別して示す。例えば傍注の「（ママ）」は、「原文表記のママ」を意味する翻刻者による私注の謂である。
5. 『西行聞書』に異文注記とともに施された傍線は、原本に附されたものである。
6. 『西行聞書』（1）「ちはやふる」の和歌注釈（12丁ウラの余白）に書き入れられた注記と頭書は割愛した。
7. 『玉集抄』の被注歌に附された集付はそのまま歌の右方に掲げた。「万」「新古」「源氏」の三種にわたる。
8. 判読の困難な文字のうち、□で囲んだものは私に判読した文字を、■で示したものは判読できぬ文字を示す。

玉集抄

・・・

万

千はやふるいつもの森にみきすへてねきかかけつる紅葉ちらすな（1）

ちハやふるいつもの森にみきすゑてねきかかけつる紅葉ちらすな（1）

いつもの森・とハ大やしろの立給へる所也ミきすへてとハ御酒のことを神にたてまつる事をすへてとハいへるなり

いつものもりとは大屋しろ乃立給へる所也ミきすへてとハ御酒のことを神に奉・・・る事をすへてと・云・・也・

さけをみきとハいふ也ねきかかけつるとハ神人の神に物申をかけつるとは申也ねきこと、もいふは神にねきの物申

酒・をみきと・云・也ねきかかけつるとハ神人の神に物申・かけつるとハ申也ねきこと、も云・ハ・・・・・・・・

事をいふ也・・・・・・・・・・・・千はやふるとハまくらことは也千はやふる神なと、つ、くる也

・・・・・神なととつ、くる也惣して神祇乃詞にはちはやふるとハ枕・・こと葉也ちはやふる神なと、つ、くる也

惣して神祇の詞にハ千はやふるとつ、くる也此・哥の（大）意・ハ紅葉・をちらさしと御酒を神木（ママ）手向ていのる心也

・・・・・・・・・・・・・・この哥の大意はもみち・散・さしと御酒を神に手向ていのる心也

万

千はやふる香椎・の宮・の神枕ハ神・のミそきにたてる也ける（2）
ちハやふるかしゐのミや乃神枕はかミのみそきにたてる也けり（2）

かし井の宮はつくしにまします也八幡にておハします也あや枕・とある本もありみそきとハ神の御・躰をつくり申
かしゐの宮はつくしにまします也八幡にてをはしまし・あやすきとある本もありみそきとハ神の御神躰を造・・申
木を云へり御曽木とかけり千はやふるかし井とつ、くるも神とハいはねともかし井八幡にてましませハ千はやふる
木を云・り御曽木とかけりちハやふる香椎・とつ、くるも神とはいはねとも香椎・八幡にてましませハちハやふる

香椎とつ、くる也かし井はこさきおとこ山此三所は何も八・幡・にておハします也・・・・
香椎とつ、くる也香椎・箱・崎・おとこ山此三所は何もはちまんにておハしますなりよめる

新古

風そよくならのを河の夕暮ハミそきそ夏のしるし也ける（3）
凪そよくならの小川の夕暮はみそきそ夏のしるし成ける（3）

この哥ハ六月晦日の哥也ミそきとハ河にのそミて水をあミて身のうき事・をはらひなかす也ちかやをも川て輪をつ
この哥ハ六月卅日の哥也御そきとハ河にのそミて水をあミて身のうきことをはらいなかす也ちかやをもつて輪を作
くるあるひは人かたをつくりて身をなて、水をなかす也此哥の本意ハ凉・しきをむねとしたる哥也
・りあるひは人かたをつくり・身をなて、水になかす也此哥・本意ハす、しきをむねとしたる・也（哥イ）

風そよくならとハ木のならにしなしたる也ならの木に風・・そよき小河（ママ）のゆふくれはこと〳〵く秋の氣色也こ、に
「凪そよくならとハ木のならにしたる也（右傍補入）」ならの木にかせのそよきたる・夕・暮・は悉・・・・炁の氣色也こ、に
人の・・御秡・する斗・・夏の氣色也茅・・のわをこゆ（ゆ）るなと、いふ句は夏の氣にて神祇也御秡・・・は水邊也
人のするミそきするハかり夏の氣色也ちかやの輪をこ（ゆ）る（り）（坎イ）りなと、云 句ハ夏乃季にて神祇也ミそき一つハ水邊也

万

あのをとせすかよふ駒もかなかつしかのま、の継・橋たえす忍ハん（4）
あの音（如本）・せすかよふ駒も哉・勝・鹿・のま、のつき橋絶・す忍ハん（4）

あのをとせす・・・とハあしのをとせぬ駒かなといへる心なり勝鹿のま、のつきハし・ハ下総のくに也此・哥の本
あの音・せすかよふとハあしの音・せぬ駒かなといへる心也・勝鹿のま、のつきはしとハ下総・國・也この哥の本（ハイ）

意ハ忍ふ恋なるゆへにあしのをとせぬ駒も哉・とねかひたる哥也
意は忍・恋なるゆへに足・乃音・せぬ駒もかなとねかひたる哥也

鳰とりのかつしかハ(ママ)せハにへすともそのかなしさを外にたてめや（5）
鳰鳥・のかへ(ママ)しかいハ(ハイ)せハかへすともそのかなしひを外にたてめや（5）

にほとりのかつしかわせとハ鳰・とりの水のそこよりかつきあけたるわせのこと也このわせいねをかつしか・こほにほ鳥・のかへ(ママ)しかハせとハにほとりの海に・・・・・・・あけたるわせのこと也このハせハ(ママ)ねハ手をかへ(ママ)しかのこほりの人つくりたる也にへすとハくうこと也この里・のならひとしてこのわせをつくりいたしてくふ時・ハ他人にくりの人つくりたる世(ママ)にへすと・くふこと也このさとのならひとしてこのわせをつくり出・してくふときは他人にくはせす我おやこしんるいハかりあつまりてくゐて戸をたて、うちへいれぬ也・かやうなれ共・我・おもふ人をハそはせす我親・・・・類・斗・・集・・・てくひて戸を立てる故に・・入ぬなりかやうなれともわかおもふ人をハそとにたてめやといふ心也そのかなしミとハわかおもふ人のこと也
とにたてめやと云・心(イ無)也そのかなしひとは我・おもふ人の事・也

万

まゆのこと雲井にみゆるあはの山おきこきさかる舟にかくれて（6）

まゆのこと雲井にみえしあはの山 仲(ママ)こきさかり舩にかはれ(くイ)て（6）

まゆのこと、ハはまの事と・いふ心・・也山のとをきをハまゆをつくりたるにたとふ・也・遠山まゆなと、云へる

まゆのこと、ハ山・のことくと云こゝろ也山のとをきをハまゆのつくりたるとたとふるなり遠山まゆなと、いへる

も此・心也あはの山とハ四國にあはの國といふくにありそのくになる山をあハの山と云也その山を 沖 こく舟より

もこの心也あはの山とハ四国にあはの国と云・國・有・その国・なる山をあはの山と云也そめ(のイ)山を 仲(ママ)こく舩より

ミたる躰也こきさかるとハとをさかる心也舟にかくるゝとハ遠・さかるまゝ舟・より見えぬ心・・也・

ミたる躰也こきさかるとは嶋かくるゝ心也舩にかくるゝとハとをさかるまゝふねよりみえぬこゝろなり

ミやこ鳥千鳥のはねにすへさせ てはまのかへさのつとにとらせん（7）

ミやこ鳥千鳥の羽・にすゑ(ママ)ませて濱・のかへさのつとにとらせん（7）

都・・鳥とハしきのおほきなるほとの鳥也墨・田河によめる伊勢物語の説・のことし此哥ハ有・人海・の有・所へミやこ鳥とハしきの大・さなる・・・鳥也すミ田川によめる伊勢物語乃セ川のことし是・ハある人うミのある所へまかりて都・・を思・ふ人を丶きて彼海・邊より・帰るとてよめる也都・・鳥を千鳥の羽ねにすへさ[せ]てなとまかりてミやこにおもふ人を置・て又海のほとりに帰るとてよめる也ミやこ鳥を行(ママ)鳥のはねにすゑ(ママ)ませてなと

、いふ事ハ有・ましきやうの事・なれともおもふ人をいかにかなと心さしをはけますゆへ・かやうによめ・・りは、云・事はあるましきやうのことなれハ・おもふ人をいかにかなと心さしをはけます故・にかやうによめるなり濱まのつと、ははまよりかへる家つとの事也

・のつと、ハ濱・よりかへる家つと・・也

万

鶯・・・ハゐなかのすにてそたてともたミたるねをハなかぬ也けり（8）

うくひすハいなかかたにてそたてとも民(ママ)たるこゑハ鳴・ぬ也けり（8）

ゐなかハ人の物云聲・のなまる也それをたミたるねとハいふ也うくひすハゐなかにてそたて・・ともなまりたる聲田舎・は人の物云こゑのなまる・それをたミたる聲とハ云・也うくひすのいなかにてそたちたれともなまりたる聲

はなきといふ心也
ハ鳴ぬと云・心也

塗・人のしらさらめこゑ(ママ)沖中にうきつこつミにのり釣に行（9）
海士人のしらさ、めこゑ仲(ママ)中にうきつこつみに乗・釣に行（9）

しらさらめこゑ(ママ)とハしらなミのこと也うきつこつみとハちいさき舟也
しらさ、めこゑとハしらなミの事・也うき川こ川ミとハ・・さき舩也

万

郭公・・・こよなきわたれ灯をつく夜になそへその影を見ん（10）
ほと、きすこよなき渡・れ灯をつく夜になそへその影をミん（10）

こよなきわたれとハこよひなきわたれといふ心也つくよになそへとハ月夜にといふ心也なそへとはなそらへてといこよなき渡・れとハ今夜・鳴・渡・れといふ心也つく夜になそへとハ月夜にと云・心也なそへとハなそ・へてと云

ふ心也なそらへてとハたとへたる儀・也
・心也なそらへてとハたとへたること也

七夕やおなし河原にたつた姫紅葉・をハしにわたす年〳〵（11）
七夕やおなし河原に龍・田姫もみちをはしに渡・す年〳〵（11）

たなハたハ七月七日に天の河原にはしをかけて逢・せをまつ星也そのハしを紅葉の橋・と云也此・河・原に立田姫
・・・・・・・・・・・・・・・・・・はしをかけてあふ夜をまつ星也そのはしを紅葉のはしと云也このかハらに龍田姫

もたつかと云心・・ハ立田姫とハ秋を領・・する神の名也時雨・をふらして草木を紅葉せさ・・・する神也しか
もなつかと云こゝろは龍田姫・は炁をりやうする神の名也しくれ・ふらせて草木を紅葉せさせ給ひける神也然・

れは此・橋・の紅葉・をも立田姫・のしわさなるかとよめる也
・者このはしをもみちをハ龍田ひめのしハさ・・かとよめる也

かさゝきのわたせる橋にをく霜の白・きを見れハ夜そ更にける（12）
かさゝきの渡・せる橋にをく霜のしろきをミれハ夜そ更にけり（12）

此・かさゝきの橋といふ事ハむかし下界にゆふしはくやうとて二人ふうふのものありふたりなから月をもてあそふこのかさゝきの橋と云・事ハむかし下界にゆふしはゝゆふとて二人ふうふの物・あり二人・なから月をもてあそふもの也下界のえんつきてある夜月のおもしろかりしにからすとなりて天へとひあかりて天河の両方のきしにすミけもの也下界の縁・つきてある夜月のおもしろかりしに烏・・となりて天に飛・あかり・天川の両方の岸・に住・けり此・ふたつ乃からす七月七日の夜はつはさを両方のきしよりさしのへて橋となして七夕をわたしてあハする也是りこのふた川のからす七月七日の夜はつはさを両方のきしよりさしのへて橋となし・七夕をわたしてあハする也是をかさゝきのハしといへる也さてわかる、あした・七夕の紅涙をなかしてかさゝきのハしを紅葉にそむる時を紅葉をかさゝきのはしと云へ・りさてわかる、あしたの七夕の紅涙をなかしてかさゝきのはしを紅・に染・る・を紅葉のハしとハ云へりほしのあふ時・ハかさゝきのはしといひわかる、時・は紅葉・の橋と云也此・哥の本意ハ霜天にのはしとハ云・りほしのあふときはかさゝきのはしと云・わかる、と支ハもみちの橋と云也この哥の本意は霜天に満・といふ事をよめり夜・うちふけて天をミ・れはしろ〳〵と霜の更わたる時の躰也さてかさゝきのハしのことハミつと云ことをよめり夜のうちふけて天をミたれハしろ〳〵と霜のふけたる躰の哥也・・かさゝきのはし乃ことは

七月七日なり其・時・霜なと・ふることハあるましけれともかくのことくよめり子細猶くハしくハ・・口傳ニあり
七月七日也・そのとき霜なとはふる事・・あるましけれともかくのことくよめりこの・・・上・もまた口傳・・・

霜・といふかつらき山にふる雪ハまなく時なくおほ丶ゆるかな（13）
しもといふかつらき山に降・雪ハまなく時なくおもほゆる哉・（13）

しもといふかつらきとは枕・・詞・・也・此・かつらきやまハ山伏・の入峯・也山・ふしのもてるつえ・・をしも
しもといふかつらきとハまくらこと葉なりこのかつらき山とハ山ふしの入ミね也やまふしのもてる杖・也是をしも

と丶云也それをしもといふかつらきといへり此・かつらき山ハ雪のふかき所也まなく時なくとハひまもなくふると
と丶云也また・しもと云・かつらきといへりこのかつらき山ハ雪のふかき所也まなく・といふハ隙・もなくふると

云心也
云心也

この山にしほるしほりハ誰・ためそ我・身を分てうめる子のため（14）
この山にしほる枝折・ハたかためそわか身を分てむめる子の為・（14）

この哥ハむかしハ日本に老たる人のしにちかくになるをハ山野にすて、ける也するかの國に夫・婦のものあり・・この哥ハむかし・日本に老たる人の死・ちかく・なれ・ハ山野に捨・・ける也するかの国にふう婦の者・有・けりこの妻のは、年たけたるをふしの山につれてむこ乃おとこのほりけるにかのは、木のえた・・をおりかけ〳〵のほこの妻の母・年たけたるをふしの山につれてむこのおとこのほりけるにかの母・木の枝・ともをおりかけ〳〵のほるこの心ハわれを山・ふかく捨てむこのおとこかへらんに道まよハセしのしるしのため也しかうしてこのは、をむる・・心はわれをやまふかく捨てむこのおとこかへらんに道まよハ・しのしるしのため也然而・・・御・母・をむこのおとこ捨て・帰・る時・大地われてわき入ぬ此は、此・おとこのもととりをつかんてひきあけさまによめる哥このおとこすて、かへるとき大地われてわき入ぬこの母このおとこのもととりをつかんてひき上・さまによめる哥也我・身を分・てうめる子のためとハむすめのことをいへる也其・時・山・神この哥の心を感・・て大地くいあひ也わか身をわけてむめる子乃ためとハむすめの事・を云・る也そのとき山の神この哥・・をかんして大地くひあひておとこたすかりぬこのこと其・時・の御門・きこしめしおよひ給て山にすてけるしうと母をめし返・・て其・時ておとこたすかりぬこのことそのときのみかと聞・・めしおよひ・・山に捨・たるせうと・をめしかへしてそのと

・より此・國の名を養老國といへりふしといふ句にしほりをつくる・此いはれ也
きよりこの国の名を養老國と云・りふしと云・句にしほりを作・る事この謂・也

万

むらさきの御かりは寒・しましろなるくちの羽かいに雪そちりをふ（15）
むらさきの御狩・ハしろしましろなるくちの羽かひに雪そちりおふ（15）
むらさきの御かりはとハミやこのほとりにあるむらさき野のこと也この野にて天子御狩ありし所也くちの羽かいと
・・・・・・・・・・・・・・・むらさきの、事・也この野にて天子御狩有・し所也くちのはかひと
ハ鷹・のこと也雪のちりをふとハ世上・に人のちろほうといへること也・ましろなるとハしろ・鷹・の事也
ハたかのこ・也雪のちりおふとハ代〱に人のくちほふと云・・心・なりましろ（なるイ。）とハしろ支たかの事也
あかねさす紫・・・野雪しめの雪野守ハしらす君か袖ふる（16）
あかねさすむらさきの雪しめの雪野守ハしらす君か袖ふる（16）
あかねさす紫・・・野・とハむらさきのねハあかくさす物也あかねむらさきおほかたおなし色の物なる故にかやう
あかねさすむらさきの雪・はむらさきのねはあかくさす物也あかねむらさき大・方・同・・・心なる故にかやう

によめりむらさきの雪をあしく心えたる人雪と心得たるわろし野を行と心えたるかよきなりしめ野もむらさき野と
によめりむらさきの雪を。（あしくイ）　心えたる人雪と心えたるをなしのを行と心えたるかよきなりしめのもむらさき野も

おなし所也野守はハしらすとハいやしき物なれハ君・か袖ふるをもみすといへる心也
同・・所也野守・ハしらすとハいやしき物なれハきミか袖ふるをもミすと云・・心也

万

秋のよのさゝら井おとこ山のはに月の御舟をさしわたる也・（17）
烁の夜のさゝらひおとこ山の端に月の御舟をさし渡・るミゆ（17）

さゝらいおとことハ月のかつら男・・のこと也月の舟を・此・かつらおとこのさして山のはちかく行心也
さゝらひおとことハ月のかつらおとこの事なり月の舩とハこのかつらおとこのさして山・・ちかく行心也

空の海雲の浪たち月の舟ほしの林にこき帰・るミゆ（18）
空の海雲の波立・月の舩ほしの林にこきかへるミゆ（18）

そらのうミとハ天のひう〳〵とあをきを海・にたとふる也雲のなミといふもたちつ、きて波・に似たるを云也ほし空・のうミとハ空のひふ〳〵とあをきをうミにたとふる也雲の波・とハ・・・立つ、きてなミにたるを云也ほしの林・・とハ星・のおほきをはやしにたとふるなり

のはやしとハほしのおほきを・・・たとふる也・

万

小田やもりねぬらしひたの音もせすかりさしいねハ・・・はめなん（19）

を田やもりねぬらしひたの音もせぬかりさしいねハすかるはめ共・（19）

を田やもりとハ田にいほりをさして田・まもる人也小田守とハあしきこと・葉也ひたとハ田になかれくる水にいたをたや守・・ハ田に庵・・をさして田を守・・人也小田守とハあしきことの葉也ひたとは田になか・る、水に板・をこしらへてたて、水のなかる、にしたかひていた・水を・・・うけをとにしかのをとろく物なりすかるとハしかをこしらへてたて、水のなかる、にしたかひていたを水・こしてうつ音・に鹿・の驚・・・物也・すかるとハ鹿・の吳名也・又虫木もすかる・いふありそれハ哥にも連哥も句によるへしの・名なり又虫にもすかると云・有・それハ哥・も連哥も句によるへし

万

夏・されハすかるなる野の時鳥ほと〳〵いもにあハすも有かな（20）

なつされハすかるなるの、郭公ほと〳〵いもにあハすも有哉・（20）

夏されハとハ夏なれハといふ心也すかるなる野とハむしのすかる也なるとハ羽をならしてとふ虫也ほと、支すほ

夏され・とハ夏なれはと云・心也すかるなるのとハむし・すかる也なるとハよ（ママ）をならしてとふ虫也ほと、きすほ

と〳〵とハかさねこと葉に云へる心也ほと〳〵といもの恋しきと云心也世話のこと葉にほと〳〵なと、いふ心・

と〳〵とはかさねこと葉・・・・也ほと〳〵・いもの恋しきと云心也世俗に（ママ）こと葉にほと〳〵なと、いふこ、

・なるへし

ろ也・・・

万

かそいろハいかに哀と思・ふらんミとせになりぬあした、すして（21）

かそいろはいかに哀におもふらんミとせになりぬあした、すして（21）

かそいろとハ父母のこと也此哥ハ天神七代地神五代とわかれし時・の御神にひること申せし神ほねもなくひるといかそいろ・は父母の事・也此哥ハ天神七代地神五代とわかれしときの御神にひること申せし神ほねもなくひると云ふ虫・のことく也かたハなること・てこ川を舟にのせたてまつりて海・にすてける・龍神やしなひけれハ三年まて・むしのことく也かたわなること、てう・ほ舩にのせ・・・・てうミに捨・けるに龍神やしなひけれハ三年まてあした、すしかりけれは龍神のよめる哥となん父母ハいかに哀とおもふらんと云心也其・後・あしなとたちたまひあした、すしかりけれハ龍神のよめる哥となん父母ハいかに哀とおもふらんと云心也その後にあし・・たち給・ひけれは龍宮より帰り給ふいまのにしのミやひる子の御事也

て・・龍宮より帰り給ふ今・のにしのミやひるこの御事也

万

角笛ふけハくもりもそせむ道・のくのゑそにハミセし秋のよの月（22）

角笛ふかハくもりもそせんみちのくのゑそにハミせし炑のよの月（22）

こさふかはとハゑひすハ角にて笛をつくりていくさする時・ふけは敵・方の空・くもりくらやミいる其時・いくさこさふかハとはゑひすは角にて笛を作・・ていくさすると支ふけはてき方のそらくもりくらやミ入・・ときた、か

・にかつ也しかれハ秋の・・月にこさふかハ月のくもりなむかと云へる心也・
ひに勝・也しかれは炑乃夜の月にこさふかは・・くもりなん・と云・る心なり

源氏
いはけなき田鶴の一聲き、しよりあしまになつむ舟そゑならぬ（23）
いはけなきたつの一聲聞・しよりあしまになつむ舩そえならぬ（23）

いはけなきとハいとけなきといふ心也この哥ハむらさきのうへのいとけなくおはしましける時・より源・氏の心を
いはけなきとハいとけなきと云・心也この哥・むらさきの上・・いとけなくおはします・・ときよりけんしの心を
かけ給ひける時・の哥なりあしまになつむ舟とハ源・氏のわかことをよミ給へる也・なつむとハわつらハしき心也
かけ給ひけるときのうた也あしまになつむ舩とはけんしのわかことをよみ給へるなりなつむとハわつらハしき事也
・ゑ・ならぬとハ物をほめたること葉也殊勝とかきてゑならぬとよむ也・田鶴の一聲・とハむらさきのうへの事・
舩えそ（ママ）ならぬとハ物をほむる・ことは也殊勝とかきてえならぬとよむなりたつの一こゑとハむらさきの上・のこと

を云へ・り
をいへる也

万
おもハぬをおもふといは、大野なるみかさの森の神も知・らん（24）
おもわぬをおもふといハ、大野なる三笠・の森の神もしるらん（24）

此・哥ハある人おもふ人としてミかさの神をセいしやうにたて、おもふよしを人にいひけれハその人うたかひける
この哥・ある人おもふ人としてミかさの神をせひしやうにたて、おもふよしを人にいひけれハその人うたかひける

時・よめると也・大野なるミかさの森・とハつくしにあり大和なるかすかのミかさにハあらすうたの心ハおもハぬ
ときよめる・なり大野なるミかさのもりとハつくしにある大和なる・・・みかさにハあらすうたの心はおもはぬ

人を思・ふといは、神もしろしめすらむと云心也
人をおもふといは、神もしろしめすらんと云心也

万
夏麻引海上山の椎柴にかし鳥・なきぬゆふあさりして（25）
夏そ引海上山の椎柴にかしとり鳴て・ゆふあさりして（25）

なつそ引とハ夏あさをひくと云事也これもまくら詞・・也・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
な川麻引とハ夏麻・を引・と云事也是・もまくらこと葉也夏麻引こと（ママ）つ丶くる事は夏そ引てうむと云枕言葉也

椎柴とハしいの木まて也かしとりとハかけすといふとりのこと也ゆふあさりとハゆふへ鳥の食をもとめてはむこと
椎柴とハしひの木まて也かしとりとハかけすと云・鳥・の事・也夕・あさりとハゆふへ・乃食をもとめてはむ事・

也あさりとハ求食とかけり
也あさりとハ求食と書・也

いかにしてへたて（ママ）の海・邊を頼らんおきつ玉もをかつく身にして（26）
いかにしてへた・のうミへを頼らんおきつ玉もをかつく身にして（26）

これハ毛を人のかたより給てうちかつく時・よめり・衣裳の毛を玉裳としやうくハんしてよめる也又・海・にある
是・は毛を人の方・より給てうちかつくときよめる也衣裳のもを玉もと賞・・翫・・してよめる也またうミの・・

草をももといふ也それをよそへてよめりへたの海・邊とハうミのみきハをへたと云也おきハふかき所也・いまふか
草をも毛といふ也それをよそへてよめりへたのうミへとは海・のミきハをへたと云也おきハふかき所なりいまふか
き所のおきつ玉もを給・・・る身にていかてかあさきへたのうミきハをたのむらんと也此・うたハしわさの上手下
き所の・・・玉裳を給ハりたる身にていかてかあさきへたのうミきハをたのむらんと也この哥・ハしわさの上手下

手の用哥とやらん申つたへき
手の用哥とやらん申侍る也・

万
あひおもハぬ人をおもふハ古・寺のかきのしりへをぬかかつくかこと（27）
相・をもわぬ人をおもふハふる寺のかきのしりへにぬか・つくかこと（27）

たかひにおもハぬ人を思・ふハふるてらのかきのしりへをぬかつくかことしといふ心也かきとハひんつるのこと也
互・・におもハぬ人をおもふは古・寺・のかきのしりへをぬかつくかことしと云・心也かきかハひんつるのこと也

しりへとハひんつるのうしろ・事也ぬかつくとはおかむこと也かならすたうてう(ママ)にあるひんつるをいのるに・う
・・・・・・・・・・うしろの事也ぬかつくとはおかむこと也かならす堂・寺・・あるひんつるを祈・・にハう
しろに立・よりていきたる人に物を云やうに申也是ハはかなきことハり也・そのことく我を思・ハぬ人に物・いふ
しろにたちよりていきたる人に物を云やうに申也是ハはかなきことハりなりそのことく我をおもはぬ人に物を云・

はいらへもせぬひんつるなとに物・いふかことしと也
ハいらへもせぬひんつる・・に物を云・かこと く(ママ)・

こ、に又ひかりを分てやとすかなこしの高・根や雪の故・郷・（28）
こ、に又光・・を分てやとすかなこしのたかねや雪のふるさと（28）

此哥ハ日吉・七社・のうちに客人・権・現・と申をよミ奉りける哥也此・客人権・現・ハ本地加賀のしらやま・権
此哥は日よし七しやの内・・客人のこんけんと申・よみ奉・・る哥也この客人こんけんハ本地か、のしら山・の権
現にてましますも也ひかりをわくるとハ加賀のしら山よりひえの山・日吉・へくハんしやう申たる心也此・客・・人
現にてましますも也ひかりをわけてとハ加賀の白・山よりひゑの山乃日よしにくわんしやう申たる心也このきやく人

こんけんの御故・郷・ハこし・しら山とよめり
こんけん・・ふるさとハこしの白・山とよめり

万

ミちのくのくりくら山のほうの木の枕・・ハあれと君か手枕（29）
みちのくのくりくら山のほうの木のすてとハあれと君か手枕（29）

此・哥ハみちのくに、くりくら山といふ名所ありその山にほうの木ありほうの木まくらにする木也是ハみやこの
この哥ハミちのくに、くりくら山と云・名所なりその山にほうの木ありほうの・まくらにする木也是ハミやこの

人みちのくにへくたりて都・・の人・をこひてよめるとなむ・・・・・・
人ミちの国・に下・・てミやこのひとをこひてよめるとなん申傳へたり

かきくらし雪はふりつ、しかすかにわきえの薗・に鶯そなく（30）
かきくらし雪ハ降・つ、しかすかにわきへのそのに鶯そ鳴・（30）

しかすかにとハさすかにと云心也わきえのそのとハ我家の薗・といふ心也いへのいの字を略・・・てえと斗いへる
しかすか・・ハさすかにと云心也わきへのそのとハ我家のそのと云・心也家・のいの字・りやくして恵と斗いへる

也哥・の本意ハかきくらし雪ふりて春共見えね共さすか我いゑのそのにハ鶯・・・春を知て鳴なり・・・・
也うたの本意ハかきくらし雪ふりて・・・・・・・・・家・のそのにハうくひす春・知て鳴也・とよめり

万

我こそハこもたるてへは高砂のおのへにたてる松もこもたち（ママ）（31）
我こそハこもたるてへハ高砂の尾・上にたてる松も社有（こもイ）・・（31）

こもたるてへとハこもたるといへハと云心也・又・高・砂のおのへにたちたる松もこもりたるといへりわかこもり
こもたるてへとハこもりたるいへ・と云心なりまたたか砂の尾・上に立・たる松もこもりたると云・り我・こもり
たるといふ心ハましハりをいとひ・ふかくこもりたるといふ心也又・たかさこの松もやまふかくこもりたるといふ
し・と云・・・ましハりをいとひてふるくこもりたると云・心也またたかさこ乃松も山（イ無）・ふかくこもりたるといふ

儀也
儀也

万

あつふすまなこやか下にかさねても君としねらハはたへさむしも（32）
あつふすまなこやか下にかさねても君としらねハはたへ寒・しも（32）

なこやかしたとハなこやかなるしたと云心也なこやかなるとハのとかにあた、かなる心也・かやうにあつきふすまなこやか下・とハなこやかなる下・と云心也なとやかなるとハのとかにあた、かなる心なりかやうにあつ・ふすまをかさねて・・・・・・・・君・とねされハさむしと云へる心也
をかさねてあたたかなる下にねてもきみとねされはさむしと云・・心也

わくらハにとふ人あらハすまのうらにもしほたれつ、わふとこたへよ（33）
わくらハに問・人あらハ須广の浦・にもしほたれつ、わふとこたへよ（33）

此・哥・ハ行平・卿・の哥也行平・須广・・へなかされてよミ給へるとなりわくらはに問・人有・ハとハまれにもこのうたハ行ひら朝臣の哥也行ひらすまの浦になかされて讀・給へると也・わくらはにとふ人あらはとハ・・・・

問人有ハといへる心也わくらハといふハ五月・の比紅葉・したる葉也まれなる物なれハわくらハに問・をまれにと
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・さ月雨の比もみちしたるは也まれなる物なれハわくらはにと。ふイ。をまれにと
ふとハ云へる也稀・にも問・人・・有・ハ須广のうらのしわさとしてしほたれわふるとこたへよと也
ふとハいへる也まれにもとふなと、あらハすまのうらのしわさとしてしほたれわふるとこたへる・也

みちのくのあたちか原・のしらまゆミそりとしりなハけつらさらまし（34）
みちのくのあたちかハらのしらまゆミそりとしりなハけつらさらまし（34）

この哥ハミちのくのあたちのこほり行平の所領也・此・こほりより夫丸のほりけり其比もろこしよりそりといふ名
この哥ハみちのくの・・・・こほり行平の所領なりこのこほりより夫丸のほ・けり其比もろこしよりそりと云・名
草日本へわたりけりその草を行平の庭へうへられけるを庭のさうちしける時彼・夫丸そりといふ草をけつりすてけ
草日本へわたりけりその草を行平・庭にうへられけるを庭の掃・地しける時かの夫丸そりと云・草をけつりすてけ
る名草ともしらすけつりすてけるを行平腹・立・して此・夫丸をいましめなはをかけられける時・此夫丸のよめる
る名草ともしらすけつり捨・けるを行平ふくりうしてこの夫丸をいましめ縄・をかけられけるとき・夫丸のよめる

哥也あたちのまゆミとてこのこほりにある物なりしらま弓・そりと・つゝきおもしろき哥とかや然・・をよき哥・
哥也あさちのまゆミとハこのこほりにある物也・しらまゆミそりと云つゝき面・白・・哥とかやしかるをよき哥に
よめりまことにこの道・地にをちすたれぬとて此・夫丸をきられけるとかや其・時・の天子きこしめして行平を須
よめりまことにこのミちぢ・をちすたれぬとてこの夫丸をきられけるとかやそのときの天子きこしめし・行平・す
广のうらへなかし・給へるとなむ此・さた古今集の序にたけきもの、ふも心をやハらけてとかけるもこのことハり
まのうらへなかされ給へるとなんこのさた古今集の序にたけきもの、ふも心をやわらくるをかけり・この理・・・

欤・
なり

此・殿ハむへもとみけりさき草の三葉四葉に殿作・りせり（35）
この殿ハむへもとみけりさき草の三葉四葉に殿つくりして（35）

この殿・とハ内裏のこと也むへもとミけりとハけにもとミけりといふ心也さき草のとハさひわひと云心也幸の字を
この殿ハとハ内裏の事・也むへもとみけりとはけにもとみけりと云・心也さき草・とハさいわひと云心也・・・・

さきくさとよむ也三は四葉・とハ三むねつくり四むねつくりと云心也又・一説・・檜木をさきくさと云へりもろこ
・・・・・・・・三葉四葉にとは三ね（ママ）・・・・四むね造・・と云心也また一説には檜木をさき草・といへりもろこ
しとやらんにある山にすむ人あり檜木のもとよりなかる、水をのミて無病自在にしてよハひ久・しく・たもてりそ
しとやらんに有・山に住・人あり檜木の本・ゟ・なかる、水をのミて無病自在にしてよハひひさしきをたもてりそ
れより家をも檜・木にて作・り又井をほりてハひの木をけつりて入る、事此いはれ也・・・・・・・・・・・・
れより家をもひの木にてつくる又井をほりてはひの木をけつりている、事此理・・也幸の字をさき草とよむ也

勝ま田の池に水なし蓮なししかいふ君かひけなきかこと・（36）
勝間田乃池に水無・蓮無・しかいふ君かひけなきかこと、（36）

かつまたのいけ遠州也・心ハ池とハ云へと・水もなく蓮もなしたとへハ人としてひけのなきかことしといふ心也し
か川またの池・遠州に有名は池とハいへとも水もなく蓮もなしたとへハ人としてひけ・な支かことくと云・心也し

かいふ君かとハかくのことくいふ君のひけ・なきかことしといへる心也これは何・事にもあるへき物にハある・・
かいふ君かとは如此・・・言・君か（イ無）ひけのなきかことくと云・・心也是・ハなに、てもあるへき物にハあるへき

かよしと云へる心也池にハ水・あり蓮・・あるこそも川ともなれ人にハ又ひけあるこそ尤なれ世間のことハりにかかよしといへり・・池にハ水のありはちすあるこそ・・・・・・・・・・・・・・・・・尤なれ世間の理・・・にかけたる道をいとへる哥なるへし

けたる道をいとへると云也・・

小車のしちのハしかき百夜かき君かこぬ夜は我そ数・かく（37）

小車のしちのはしかき百夜かき君かこぬ夜は我そかすかし（ママ）（37）

此・哥ハある人女をこひたるに女のいはく小車乃しちにも、夜かよひてかすをかきつけ・百夜にミてん夜逢・へしこの哥はある人女を恋・けるに女乃いはくを車のしちの百・夜かよひてかすをかき付・よ百夜にミてん夜あふへしといひけれハ九十九夜まてかよひてかき付たるも、夜はにミてんとしける日おとこのおやなくなりにけれはゆかすそといひけれハ九十九夜きてかよひて書・付ける百・夜にミてんとしける夜おとこの親・なくなり・けれハゆかすその夜女あハんとて小車・・のしちにまちけるにおとこここさりけれは女のよめるとなむさてこそわれそ数・かくとよの夜女あはんとてをくるまのしちに待・けれハおとこここさりけれハ女のよめるとなんさてこそ我・そかすかくと讀

めることハり・分明なれ・・車・・のしちとハのる時・ふミつたへの・・やうなる物也榻とよめり(ママ)
・ることハり也分明なれハ也くるまのしちとハのるときふミつたへにするやうの・物也榻とよめり(ママ)

天とふやたつの馬・をもゑてしかなならの都・・に行帰来む（38）
天飛・やたつのむまをもえてし哉・ならのミやこに行帰こん（38）

人丸の哥・也天を飛・たつの馬にも哉・ならの都・・へゆかんと也是・ハ人・丸遠國・旅行なとの時・よミ給へる
人麿のうた也天をとふた川の馬にもかな・・・ミやこへゆかん・・これハ人麻呂遠国の旅行なとのときよミ給へり(ろイ)

欤ゑてしかなとハねかひたるかな也か・の字をにごり(ママ)てよむへし・・・
かえてしかなとハ願・・たるかな也(イ無)かなの字をにこりてよむへしと云り

いもにこひ和哥の松原見わたせハ塩干のかたに田鶴鳴わたる（39）
いもにこひ和哥の松原ミ渡・せハ塩ひの方・に田鶴鳴渡・る（39）

是も人丸の哥也この和哥の松・原・ハい勢の國也紀伊の國の和哥のうらにハ各・別・の所也いもにこひとハいもを
是も人丸の哥也このわかのまつハらは伊勢の国也紀伊・国のわか・・・とハかくへつ・・也いもにこひとはいもを

こひといふ心・・也しほひのかた・田鶴なきわたるとハかやうにおもしろきうらの詠をわかおもふいもに見勢はや恋ると云・こゝろ也塩・干の方・に田鶴鳴・渡・・とハかやうにおもしろき浦・を詠を我・おもふいもにミせハやといふ心・・なるへし人丸の哥にハあまた此・心さしあり・・・

と云・心はへ有・へし人麿の哥にはあまたこの心あるかたおなし

さをしかのいる野の薄・・初・尾花いつしかいもか手まくらにせん（40）

さをしかの入・野のすゝきはつ尾花いつしかいもか手枕・・にせん（40）

此・哥もまへの哥のことくさをしかのなくもあハれふかく又尾花すゝきもおもしろけ・れハこれをいつ・かいもにこの哥も人麿の哥也（イ無）・・・さをしかの鳴・も哀・・ふかく又お花すゝきもおもしろきなれハ是・をいつしかいもに見せんと旅行なとの時・よめるか此いつしか・はいつかなりしハやすめ字也又いつしかかやうにうつりかハ・るなミせんと旅行なとのときよめるか此いつしかとハ（イ無）いつか也・しハやすめ字也又いつしかかやうにうつりかハれるなと、いへるいつしか・各別也哥によりて心・・得へし・

と、いふ・いつしかハ各別也哥によりてこゝろへ（ママ）へし也

いつしかも神さひぬるかかこ山のむ杦・かもとに苔・生ふるまて（41）
いつしかも神まい（ママ）ぬるかかく山のむすきか本・にこけおふるまて（41）

このいつしかハ世話に云へるいつしか也・かこやまは大和・也む杦・とハわかき杦也人の子をむすこなと、いへる
このい川しかハ世俗にいへるいつしかなりかく山・ハやまと也むすきとハわかき杦也人の子をむすこなと、いへる

かことし若木の杦かとミしにいつしかも・・・・・神・さひたるよとよめる也神さひたるとハひさしきといふ儀
かことし若木の杦かとミしにいつしかもは（し）や苺（くイ）むしてかみさひたる・と云事・也・・・・・・・・・・・・・・・

也神の字にあらす常玖とかきてかミさひてとよめる也神さひて・・といふ・・は神祇にあらすこけのかミさひてな
・神乃字にあらす賞玖とかきてかミさひてとよめり・神さひてなと、云・こと葉神祇にあらす　苺（ママ）の神・さひて・

とよめるもあり但やしろのかミさひて住・吉・の神・さひてなと、神祇のたよりを云たて、ハ神祇なるへし
と讀・るも有・但やしろの神・さひてすみよしのかミさひてなと、神祇のたより・・・・・・・・成・へし

とりつ（川坎）なけ玉田よこ野のはなれ駒つ、しかけたにあせひ花さく（42）
とりの（川イ）なけ玉田よこの、はなれ駒つ、しのけたにあせひ花さく（42）

これは玉田よこ野やまとやましろ両國としるせり哥の本意ハあせひといふ木は馬の毒なりつゝしかけたとハつゝし是・は玉たよこのやまと山・城・両国としるせり哥の本意はあせひと云・木・馬のとく也つゝしかけたとハつゝしのねけたのやうにさし出ておふる物也あせひも又つゝしにわたる物也つゝしのある所・・にかならすおふる物・也の根けたのやうにさし出ておふる物也あせひも・つゝしにたる物也つゝしのあるところにかならすおふるもの也

豊・國のかゝミの山に岩戸たてかくれし君ハまてときまさす（43）

とよ国のかゝみの山に岩戸たてかくれし君かき（ママ）てときまさす（43）

とよ國とハつくし豊後のくに也このくにゆか（に）ゝミ山・といふ山あり此・山に岩屋ありつくし邊の人のしにてハ此・とよ国とハつくしふんこの国也この国・にかゝみやまと云・山ありこの山に岩戸ありつくし邊の人の志にてハこの岩屋の中へゆきてかくるゝなと、いひならハせり此の哥の心ハある女おとこにをくれて鐘（ママ）・・山の岩やに戸をた岩戸の中に行・てかくれるなと、いひならハせりこの・・心はある女男・・にをくれてかゝみの山乃岩屋に戸をたて、かくれたるとき、てまてともこぬとなけきてよめり

て、かくれたると聞・てまてともこぬとなけきてよめり

岩戸わるたちからもかなてをよハミ乙女・にしあれハ末もしらなく（44）
岩戸わるたちからもかな手をよハミをとめにしあれハ末ししらなく（44）

此哥もまへの心を、ひてよめり里・人のかくれたる岩戸を我・ちからもかな・おとめハ女なれハ岩戸わるすへもし
此哥もまへの心をおひてよめりさと人のかくれたる岩戸をわかかたなもかなとおとめハ女なれハ岩戸わるすへもし
らなくとハやうをもしらぬといへる心也世話にいへるするすへもしらぬなと、いへるおなし心也・岩戸わるたちか
らねは・・・・・なと、云ハ・・・・世俗に・・・するすへもしらぬなと、いへる同・・意なり岩戸わるたちか
らもかなとよめるハむかし日神のあまの岩戸に御こもりありける・神とかくしをはやしうたひけるに・心・・とけ
らもかなとよめり・むかし日神の天・・岩戸に御籠・・ありけるを神とかくし・はやし・たへけるに御こ、ろとけ
て御神岩戸をすこしあけ給へる時・たちからをの御こと、申大力の神此・岩戸を引・やふり他方へなけ給・ける時
て御神岩戸をすこしあけ給へるときたちからおの御こと、申太刀乃神この岩戸をひきやふり他方へなけ給ひけると
・の心・・を思あはせて岩戸わるたちからもかなとよめる也信濃・・國とか・しの大明神たちからをの御ことなり
きのこ、ろをおもハせて岩戸わるたちからもかなとよめり・しなの、国とかくしの大明神たちからおのみこと也・

今日よりハ木曽路のさくら咲にけり風の祝・・子枚まあらすな（45）
けふよりハきそちの桜・・咲にけり風のはふりこ透間あらすな（45）

きそとすはちかき所也風の・はふりことハすハの大明神のけんそくの神也たとへハ十二天のうちに風天なと、言へ
きそちとハちかき所のかせ也はふりことはすハの・明神のけんそくの神也たとへは十二天の内・に凪天なと、いへ
る神を風の祝・・子といへる欤木曽路のさくら咲・ぬ風・のはふり子・心ありてちらすなといへる心・・也
る神を凪（をイ）のはふりことといへるかきそちの桜・・さきぬかせ乃はふり子（イ無）と心有・てちらすなといへるこ、ろ也

さくらかり雨ハふりきぬおなしくハぬるとも花・の陰・にかくれん（46）
桜・・かり雨ハ降・きぬ同・しくハぬるともはなのかけにかくれん（46）

此・哥のさくら・ハ櫻にあらすさ發・言・にいひてさくらかり雨ハふりきぬとよめる也いつも雨のふり来るハくら
この哥のさくらにハ・・あらすさほつこんにいひて・くらかり雨ハふりきぬとよめり・い川も雨のふりくるはくら
くなれとも春の雨ハくらくなりてふる・也宗砌法師この哥のさくらかりにてつかふまつる發句にさくらかり梅・の
くなれとも春・雨はくらくなり・ふる物也宗砌法しこの哥の桜・・かりにてつかふまつる發句にさくらかりむめの

雨ふる五月かな・・と侍り・
雨ふるさ月かななと、侍ける

恋するに何になるといはませハわれや浄土のあるしならまし（47）
恋するに仏になるといかませハ我・や浄土のあるしならまし（47）

此・哥・ハ拾遺集の恋・部の哥也心・・ハ我恋するに心をつくして・・・・也
このうたハ拾遺集の恋乃部にありこ、ろハ我恋する・心・つくし志たるよし也

木葉ちる宿はき、わくかたそなき時雨する夜も時雨せぬ夜も（48）
木葉ちる宿ハ聞・分・方・そなき時雨するよも時雨せぬよも（48）

此・哥ハある人秀哥を一首よませて十年の命をつ、めて給れと住・吉・の明神に祈申けるか既・・死におよひける
この哥ハある人秀哥を一首よませて十年の命をつ、めて給へとすミよしの明神に祈申けるかすてに死期に及てある
時・なミたをなかして住・吉・の明神を恨・・たてまつりつ井に秀哥とおほしき哥をよませてたひ・ねと申けれハ
と支泪・・をなかしてすみよしの明神をうらミ奉・・・り終・に秀哥とおほしき哥をよませてたひへぬと申けれハ

明神老翁とけんし給・てのたまハくいつそやの哥合に木葉ちる宿・ハの哥かちになり侍・けるハ我よませし也とあ
明神・翁とけんし給ひての給ふ・・いつそやの哥合に木葉ちるやとはの・かちに成・侍りけるハ我よませし・とあ

らたにおほせられけれは所願成就とよろこひけるとなん
らたにおほせられけれハ結願成就とよろこひけるとなむ

うな井子かはなちのかミを取上てまきそめ河のいく世ちきらん（49）
うなひこかはなちのかミを取上てまきそめ河のいく代ちきらん（49）

うな井子とハわらハへのこと也はなちのかミとハいまたゆひもあけぬかミ也とりあけてまくとハわらハ・のかミな
うなひことハわら・へのこと也はなちのかミとハいまたゆひもあけぬかミ也とりあけてまくとハわらハへ乃かミな

れハ・いへりまきそめ河とハつくしにある名所也そうしておさなくよりちきる女のかミをハおとこのゆひそむる也
れハといへりまきそめ河とハつくしにあり名所也惣・・ておさなきよりちきる女のかミをハおとこ乃ゆひそむる也

いさり火の光にまかふか、り火は身のうき舟やこかれきぬらん（50）
いさりひの光にまかふか、り火は身のうき舩やこかれきぬらん（50）

十この哥ハあかしのうへのかつらのさとにてよミ給へる哥也あかしの浦にてつねハめなれ給へるあまのいさり火をか
この哥ハあかしのうへのかつらのさとにて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・か
つら川のあゆとるうかひのか、り火を見て思・ひいたし・給へる哥也あかしのうへと申は源・氏の須广へさすらへ
つら河のあゆ・・うかひのか、り火をミておもひ出しての給へる哥也あかしの上・と申ハけんしのすまへさすらへ
イ無
給ひける時あかしの入道のむすめのちきり給ひけるそれをあかしのうへと申也・源氏都・・へ御帰の時・つれ給・
給ひける時あかしの入道乃むすめにちきり給ひけるそれをあかしのうへと申なり源氏ミやこに御帰のときつれ給ひ
て先・かつらのさとにすませ給ひけり・
てまつかつらの里・にすませ給ひける也

〈以下次号〉